

アメリカ英語における中部方言の 特 徴 に つ い て

武 本 昌 三

言うまでもなく、アメリカ英語の方言は、植民地の成立と無関係ではない。北部方言も南部方言も、それぞれ初期のイギリスからの移住民が、イギリス本国で使っていた方言を母胎にして形成されてきた⁽¹⁾。このことは、中部方言の場合にもあてはまる。

今日のアメリカの、いわゆる中部方言地域には、主としてイギリス北部、及び西部の出身者が植民した形跡があるので、これらイギリス北部、及び西部の方言が、移住民とともにアメリカ中部へ持込まれ、今日の中部方言の基礎をなしていると考えてよいであろう⁽²⁾。

このイギリスからの植民の、いわばかなめであった Philadelphia 周辺は、同時に中部方言のかなめでもあった。1720年頃から渡来しはじめたドイツ南西部からの大量の移民を加え、この地域から一部は西へ、Ohio 州を突抜けて更に奥地に向い、また一部は大きく弧を描きながら末ひろがりに南下して Georgia 州の北部にまで伸びていった。このような移住者達の歴史的足跡は、今日の中部方言地域と一致する⁽³⁾。

以下、この地域における方言の代表的な、あるいは最大公約数的な特徴を、前二稿と同様に、語い、語法、発音の三つに分けてまとめていきたい。

(1) 拙稿「アメリカ英語における北部方言の特徴について」及び「アメリカ英語における南部方言の特徴について」参照。

(2) Pyles, *Words and Ways of American English*, p. 58.

(3) この中部方言地域の区分は Kurath の *A Word Geography of the Eastern United States* による。

1. 語 い

a. blinds

ありふれた語であるが、通常アメリカ英語では二つの種類に分けて考えられる。*DAE* の分類に従えば、その一つは、A wooden screen for a window; usually applied to each of two slatted and hinged frames, the pair being called 'the blinds.' とあって、1771年からの用例が記録されている。There he flung open the blinds and rummaged in the drawers. (Page, *Red Rock*) などの *blinds* がこれであって、その用例は極めて多い。

次は、A length of material mounted on a roller and capable of being pulled up or down; a shade. とあって、「巻上げ式の日よけ」とでも言ったらよいのであろうか、用例の年代からみても、前者に比べて若干新しいタイプである。この「巻上げ式の日よけ」の意味での *blinds* が、中部方言としてひろく用いられている語で、例えば、北部で方言として用いられている *curtains*⁽⁴⁾ などとは *isogloss* で明確に区別され、その使用頻度は、West Virginia, Virginia, 及び North Carolina の西部山岳地帯, Maryland 西部, Susquehanna 河流域等において特に高い。もっとも、これらの地域でも、商業用語としては *shades* が一般化しているが、これは、いわゆる標準語としての *roller shades* の影響であろう。また中部では、北部のように、この *blinds* を *shutters* の意味で混用されることが決してないのも一つの特徴である。⁽⁵⁾

(4) この場合も、例えば *ADD* の1926年のMainにおける用例 'Pull down the curt'ns.' や 'If you spoke of *curtains* simply, you would be understood to refer to the window shades.' などのように、「巻上げ式日よけ」の意である。

(5) Kurath, *ibid.*, p. 52.

なお *curtains* が用いられる北部などでは、*shutters* の意味で *blinds* が用いられたりする。例えば1929年のMaineの用例, A house was almost invariably white with green blinds, elsewhere called shutters. [*ADD*] の *blinds* は中部方言の *blinds* とは同じではない。

この中部方言の意味での *blinds* は *EDD* の中に記載がない。これはこの *blinds* が “a recent invention” だからであろうか。 *OED* の用例にも、 *blinds* の意味に若干あいまいさが残るので、結局用例として頼れるのは、ほとんど *DAE* だけである。

I ... sometimes wish I could go right into some ... dark church, and pull down all the blinds, and shut all the doors.

— Stowe, Harriet E. *We and Our Neighbors*. (1875)

The gas was lighted in your parlor before the blinds were down, and the policeman saw him ... standing on the hearth rug.

— *Harper's Magazine* (1880)

Mr. Holmes's blinds were down; but by-and-by he raised them.

— Clemens, S. L. in *Harper's Magazine* (1902)

以上のほか *DAE* には単数形の例もあり、*ADD* にも同じく単数形の例が示されている。

She moved across the dark room and raised the blind.

— Lewis, Sinclair *Bethel Merriday* (1940)

しかし、これらが中部方言の *blinds* であるかどうかはつまびらかでない。一般的には、Kurath の調査にしたがって、複数形の *blinds* が中部方言であると考えべきであろう。

b. piece

short distance の意味でひろく用いられている中部方言である。この意味での *piece* は、もともとイギリス英語の古い方言で、Lincolnshire から Yorkshire 等の北部にかけて用いられていた記録がある。⁽⁷⁾ 現在では、イギリ

(6) 例えば、*DAE* の記載では、*OED* の *blinds* は前者の種類であるように示されているし、中部方言の *blinds* はほとんど Americanism と見ることも出来る。ただし Tucker の *American English* や *DOA* には記載がない。

(7) ただし、He lives a piece of way off. のように *of way* がつくことが多かった。[*EDD*]

ス英語としては *obsolete* であるが、この語はイギリス北部からの初期の移民が Philadelphia 周辺に持込んだイギリス方言の名残りであると考えてよいであろう。⁽⁸⁾ *OED* のイギリス英語としての用例では、1817年のものが最も新らしく、古いものでは、次のように1612年にまでさかのぼる。言うまでもなくこの当時は、まだ中部地方にはイギリスからの移民は到着してはいなかった。

By practice, euery day going a piece, and oft reading ouer and ouer, they will grow very much, to your great ioy.

— Brinsley, John *Ludus literarius or the grammar schoole*

これに対し、アメリカ英語としての用例では、*DAE* の1776年のものが最も古く、現在まで続いている。その若干の用例を年代順に並べれば次の通りになる。

We was standing by the end of a side of an Indian cornfield, up yonder a piece. — *The Battle of Brooklyn* (1776)

He limped off a piece. — Twain, Mark. *The Celebrated Jumping Frog of Calaveras County* (1865)

So I took the gun and went up a piece into the wood.

— Twain, Mark. *The Adventures of Huckleberry Finn* (1884)

Out from shore a piece, in the current, floating snags were going down. — Cobb, I. S. *Back Home* (1912)

I'll walk a piece with you. [*ADD*] (1930)

しかしより厳密に言えば、この *piece* はそれだけで上例のように “short distance” の意味を示すほか、単に “a distance” として区別出来るようである。例えば次のような場合、“short distance” ではむしろ意味の上でお

(8) The Midland origin of this expression is beyond doubt since it is found only in those two sections outside the Midland to which Midland features have often spread. Kurath, *ibid.*, p. 29.

かしい。

I've walked quite a piece today, in hopes to get to the ferry.

— Mrs. Stowe, *Uncle Tom's Cabin*

It's quite a piece from here. [ADD]

He'd ben quite a piece off. [ADD]

Knowed you had to come a fur piece from Ohio.

— Stuart, Jesse., *Men of the Mountains*

このほか, *a tiny piece, a small piece* なども上例に加えることが出来るであろう。しかしこのような表現は多くはなく, 用例もまれである。

Captain Bissel told me to get six men, with the Clinker boat,
to take him down the river a small piece.

— *Annals of 10th Congress* [DAE]

Her house is just down the hill a tiny piece from the W—
house. — Morgantown, W. V., *Post*

したがって一般的には, 中部方言として用いられる形は, 前述の “a piece” と “a little piece” であって, その分布範囲は, Philadelphia 周辺から Delaware, Maryland, Virginia を cover し, Virginia 溪谷地帯を除いて, ひろく中部全体にのびている。

a little piece の用例を ADD からひろうと次のようになる。

I wisht you'd come a little piece with me. (1916)

I went a little piece ahead of them. (1900~18)

a road a-goen off a little piece. (1926)

A little piece away stood a girl. (1940)

He skidded a little piece. (1943)

なお, この *piece* は次のように “a bite between meals” の意味でも用いられ, やはり中部方言である。

We can have a piece before we go to bed? ... I'll set you a

piece, Laban; I was just going to get me a bite of something.

— Howells, W. D., *The Leatherwood God*

Kurath の言語地図では、北部方言の *bite*、南部方言の *snack* との間に比較的明確な isogloss で示されているが、この意味での *piece* が、イギリス方言で用いられる “a piece of bread” の意味での *piece* と結びつくかどうかは明らかではない。⁽⁹⁾ しかしこの *piece* については、前者の *piece* ほど popular でないので、ここではこれ以上はふれないことにする。

c. smearcase

中部方言について述べる場合、いわゆる Pennsylvania German の影響を看過することは出来ないであろう。この Pennsylvania German の影響を受けた語のうち、最も popular なものの一つがこの *smearcase* ⁽¹⁰⁾ で、cottage cheese のことである。これは *shmeear case* と書かれたり、ときには *smear cheese* といわれたりもするが、もともと、ドイツ語の *Schmierkäs* からきた。分布密度は特に North Midland において高い。また、Hudson 溪谷の Dutch settlement 地域で、集中的にオランダ語の *pot kees* からきた *pot cheese* が用いられているほか、北部では *Dutch cheese* または *sour-milk cheese*、南部では、*clabber cheese* または *curd cheese* が用いられるというふうに、アメリカ英語の方言としても、この語は極めて多彩である。

ドイツ人がはじめて Pennsylvania へ移住してきたのは 1683 年のことで

(9) *Piece* is not uncommon in the New England counties of Pennsylvania, in parts of Upstate New York, and on the Jersey side of the upper Delaware. Since Pennsylvania expressions rarely spread to these sections and since the word is not current in New England, *piece* may here have a Dutch background. Kurath, *ibid.*, p. 72.

(10) Pennsylvania German に由来する語いには料理に関するものが多い。*smearcase* のほか、次のようなものがある。*sots*=yeast, *snit* (also *schnitz*)=dried apples, pieces of fruit cut for drying, *fat-cakes*=doughnuts (*fettkuche*), *fossnocks*=Shrovetide cakes (*fasnachskuche*), *thick-milk*=curdled milk (*dickemilich*)

あるが、大量の移民が流入しはじめたのは1727年以降で、革命の頃にはドイツ系移民の数は、Pennsylvaniaの人口の約3分の1、およそ10万人にも達するようになっていた。⁽¹¹⁾ したがって、*smearcase* は Americanism としても比較的新らしく、用例としても、*DOA*, *DAE* の次の1829年のものが一番古い。

A dish, common amongst the Germans, ... is curds and cream.
It is very palatable, and called by the Germans *smearcase*.

— Royall, *Pennsylvania*

もっとも、このような用例をみると、*smearcase* は名前とともに、質的にも *cottage cheese* とは異なったものであるかのような印象を受ける。初期においてはおそらく、製法の相違等から、そのようなこともあり得たであろうが、現在では、いわゆる *cottage cheese* であることに変わりはない。

Their cheese is ... made on the same principle as the Dutch *smearcase*.

— Magoffin, S., *Down the Santa Fé Trail and into Mexico*

この *smearcase* はまた、前述の *shmeear case*, *smear cheese* のほか次のように、*smear-cases*, *smear-kase*, *schmierkase* などの形で見られることもある。

Drink Champagn, and eat *smear-cases*. — *The Gentleman's*

Vade-Mecum; or the Sporting and Dramatic Companion. [*DOA*]

Loaf bread, ... flanked by appetizing apple-butter, snowy *smear-kase*, and dulcet honey. — *Scribner's Monthly* [*DAE*]

I took large helpings of ham and potatoes, *schmierkase*, and green salad with tomatoes. — *Saturday Evening Post* [*DOA*]

d. skillet

「フライパン」の北部方言 ⁽¹²⁾*spider* に対し、中部でひろく用いられている

(1) Pyles, *ibid.*, p. 59.

(2) 拙稿「アメリカ英語における北部方言の特徴について」参照。

方言が *skillet* である。イギリス英語としても非常に古い語の一つで、語源も明らかではない。OED の用例では 1403 年にまでさかのぼるが、それも主として、Yorkshire, Lancashire 等北部地方の方言として用いられていたことを示している。もっとも、イギリスでいう *skillet* は、長い柄のついた stew-pan のような容器のことで、中部方言の *skillet* と同じではない。しかしこれが移民とともにアメリカ中部に渡ってからは、時を経て何時の間にか「フライパン」をあらわす方言として定着したものに違いない。⁽¹³⁾

この *skillet* はアメリカにおいても、北部方言の *spider* とは例えば次の Word Book の例のように、はじめは種類の違うものとして理解されていた。

Skillet, a cast brass semi-globular utensil with 3 short legs.
Spider, a long-handled cast-iron cooking utensil with 3 or 4 legs or feet and a top.

— Green, B. W., *Word-Book of Virginia Folk-Speech*

しかしこの相違もまた、やがて不明確になり、形状も少しずつ変わってきて、現在のフライパンに統一されていったものと考えられる。ADD の中部各地の用例その他に、*skillet* そのものの形状を説明しているものが散見出来るのも、この間の事情の一端を物語るものと言えるであろうか。

A skillet is a fry-pan with legs. (1895) [ADD]

skillet, an iron cooking vessel, having usually 3 pot-like legs, a long handle, and a cover, — commonly used for baking in an open fireplace. (1908) [ADD]

The small, round skillet with cover (Dutch oven they call it) was set over a bed of coals.

— Zeigler and Grosscup, *The Heart of the Alleghanies* (1883)

(13) Pyles, *ibid.*, p. 61 参照。

なおこの *skillet* は, *skillite*, *skellet*, *skellett* の形で用いられることもある。ただしこれらは, 次の *ADD* の用例からもうかがわれるように, 一般に古く, 且つ教育程度の低い人々に限られると考えると考えてよさそうである。

One little skellet and one fryinge pann,

— Essex Institute, *Historical Collections* (1644)

I giue to Elizabeth Thomson ... a coper skillite.

— Manwaring, C. W., *A Digest of the Early Connecticut Probate Records* (1692)

I Give and Bequeath to my ... wife ... my Brass Skellet.

— *The Probate Records of the Province of New Hampshire* (1740)

e. run

「小川」は, 北部方言の *brook*, 南部方言の *branch* に対し, 中部では *run* である。この方言は特に, Pennsylvania, West Virginia 北部から Ohio にかけての地帯, Delaware 湾, Chesapeake 湾に接する Maryland 東部等で使用密度が高い。

OED によれば, この語はイギリスでも, “a small stream, brook, rivulet, or water course” の意味で, 古くから主として北部で方言的に用いられていたことがわかる。*EDD* でも Emerson が *Wild Life* の中で, creeks (locally called runs and drains) と書いていることを記録しているし, Yorkshire あたりの There's a run of water in t'beck. というような用例では, この *run* が, “a small channel of water, a stream, brook, runnel” の意味で使われていることが記されている。これらの *run* がアメリカ中部方言の *run* の母胎であることは疑いを容れない。この意味での *run* は, アメリカに持込まれてからは, 初期からの用例として次のように受継がれた。

Thence over a small run or Bottom and a ridge.

— *American Speech XV* (1663) [*DAE*]

The said fifty acres of land ... is at the head of a Run of Water which Runneth through Timothy Sheldon his land.

— *Providence Records* (1703)[*DAE*]

There is no body's of Flat rich Land to be found—till one gets far enough from the River to head the little runs and drains.

— Washington, George, *Diaries* (1770)

But a small stream is often called a run in the Middle and Southern belt. — Eggleston, E., *The Hoosier Schoolmaster* (1871)

[He] said at noon today that none of the runs or creeks have overflowed their banks.

— Morgantown, West Virginia, *Post* (1943) [*ADD*]

この *run* は、以上のように普通名詞として用いられるほか、地域によっては、小川の名称をつけて固有名詞として用いられることも多い。*ADD* の記録によれば、Montana 南西部と Arkansas 北西部で、“Generally used with a name, as Puckett's Run, Starbuck's Run” とあり、West Virginia 北部では、“Jakes Run, Scott's Run, Wade's Run, Robinson's Run, Dent's Run, Foley Run, and numerous others observed” とある。

なお、まれには北部でも *run* の用例が見られるが、これは若干 nuance の違う意味で用いられており、中部方言の *run* とは一応区別されなければならない。

With us [in New England] that which runs swiftly a part of the year, and shows a dry bed for the remainder we fittingly call a run.

— Palmer, G. H., *The Life of Alice Freeman Palmer* (1908)

f. snake feeder

「とんぼ」を意味する中部方言で、北部方言の *darning needle* とは明確な

isogloss で区別される。⁽¹⁴⁾ Kurath の言語地図では、Delaware から西へ向い Ohio にかけての地域、Allegheny 山脈の西側、North Carolina 山岳地帯等において使用密度が高い。ただし例外的に、West Virginia の大部分の地域では、Virginia 高原地帯の方言である *snake doctor* の方が *snake feeder* より多く用いられているようである。一方、Philadelphia 地帯では、*snake doctor* と *snake feeder* が植民地時代から共用されてきた形跡があり、⁽¹⁵⁾ Pennsylvania German area では *snake feeder* のほか、*snake heeder*, *snake guarder*, *snake servant* なども用いられていることが報告されている。⁽¹⁶⁾

中部地方におけるこのようなさまざまな名前は、いずれも *dragon fly* と *snake* との関係を想像してつけられていることは明らかで、南部などで方言的に使われている *snake doctor* の場合と同様であろう。

The dragon-fly is known as 'snake doctor' from his supposed professional services to snakes.

— American Folk-Lore Society, *Animal and Plant Lore* (1899)

この *snake feeder* については、OED にも EDD にも、そのイギリスにおける原型を見出すことは出来ず、DAE にも Americanism であることが示されている。アメリカ語としての用例も、DAE, DOA に 1861 年からのものが若干記録されているだけで、written evidence は多くない。

[Suppose] we wished to multiply, artificially, the number of a particular species of dragon-fly, or snake-feeder.

— *Transactions of the Illinois State Agricultural Society.*

The snake-feeder's four gauzy wings fluttered by.

— Riley, J. W., *Eccentric Mr. Clark.*

Snake-doctor, ... the dobson or hellgrammite Also [in Ohio] snake-feeder.

— *Century Magazine*

(14) Kurath, *ibid.*, Fig. 141 参照。

(15) Kurath, *ibid.*, p. 30.

(16) Kurath, *ibid.*, p. 34.

The snake-feeders are too full to feed anything—even more
sap to themselves. — Porter, G., *Freckles*

2. 語 法

a. want off (in)

I want to get off, I want to go in の代りに, I want off, I want in というのは中部独特の表現で, 北部や南部では用いられることがない。一般的には informal な会話でかなり教養程度の高い人々の間でも使われているが, formal English では避けられる。

このような短縮形は古く Shakespeare の英語などにも見られた表現であった。Kurath はこの表現が中部方言として用いられているのは, 一部 Ich will heraus. というようなドイツ語の影響を受けたからであろうと述べているが,⁽¹⁷⁾ 一方では, North Central States Records を手がかりにして, この表現がイギリス語からスコットランド方言として残り, それが移民とともにアメリカに伝わったものであるという説にも, かなりの信ぴょう性が感じられる。⁽¹⁸⁾

want off の用例には ADDに, 'I want off at the next street.' Do you want off at Washington? 'That where you want off?' などの記載があるほか, 次のようなものがある。

I tole the conductor I wanted off right away at the corner
already. — Martin, H. R., *Ellie's Furnishing*

and put them off the station where they wanted off.

— Stuart, J., *Uncle Joe's Boys*

when a student wanted off in the kitchen, I asked to do the
work. — Stuart, J., *Beyond Dark Hills*

(17) Kurath, *ibid.*, p. 79.

(18) CAU. p. 224.

‘If we had a thousand people on the bus,’ opines the driver,
 ‘the first one who wanted off would be the one farthest to the
 back.’ — *Associate Press, W. Virginia*

次は *want in* の場合である。

‘La Follette’s son wants in.’ — [ADD]

News had spread that the [U. S. armored] force was short of
 officers and be wanted in on the ground floor.

— Show, E., *South East Post*

Belgium wants in this protective arrangement. — [Curme]

以上のような用例は、要するに *want* が、*go*, *come*, *get* 等の運動の動詞
 を用いずにその意味をあらわしているものであるが、一般的には、*want off*,
want in が最も多い。しかし次に示すように、この語法はさまざまな類似の
 表現を生み出している。⁽¹⁹⁾ (用例は特に示しているもの以外は *ADD* から。)

want back [=to want to go (come, get) back]

The old crowd wants back.

Turkeys wanting back to green fields.

want by [=to want to get by]

Do you want by?

want down [=to want to get down]

‘Do you want down?’ To baby in speaker’s lap.

want free [=to want to get free]

Our colonies want free.

want home [=to want to go home]

Yanks want home again.

I was wantin’ home.

(19) ただし、これらは方言的ではあっても分布範囲が中部をはみ出すことが少なく
 はなく、中部方言というより、むしろ一般アメリカ口語と考えた方がより妥当で
 あるかも知れない。

want into [=to want to get into]

‘Lardner wants into the Harding cabinet.’

The first thing is to not ever let them know you want into
Number Two. — Jones, *From Here to Eternity*

want on [=to want to get on]

‘Everybody who wanted on the bandwagon.’

want out [=to want to get (go or come) out]

Conductor, I want out at Chestnut Street.

want through [=to want to go through (a room, or the like)]

Do you want through?

want up [=to want to get up]

Billy is able, ambitious ... He wants up.

なお、*want* 以外にも、例えば *happen in* (=happen to come in) とか、*let out* (=let ... come out) などが用いられることがある。これらも恐らく *want off*, *want in* の同類と見て差支えないであろう。

Jim would happen in and say.

— Mark Twain, *Huckleberry Finn*

a hard piece of corn-crust took one of the children in the eye
... and let a cry out of him the size of a war-whoop.

— Mark Twain, *ibid*

b. all the farther (further)

as far as, the farthest の意味で主として中部でひろく口語的に用いられている方言である。*all the farther*, *all the further* の両方とも使用頻度は高いが、どちらかといえば *all the further* の方がより一般的で、CAU によれば、この傾向は特に中部大西洋岸諸州で顕著であるという。

ADD には New York 州東部の That's all the farther I got. のような

用例もないわけではないが、むしろこれは例外的で、その他の主な用例は次に示す如く、ほとんど中部からはみ出すことはない。⁽²⁰⁾

‘Is that all the further you can run?’ Rural. (1900–18 w. Md.)

That’s all the further I got. (1914 s.e. Penn.)

This is all the farther I’m going. (1914–16 cent. Kans.)

That’s all the farther I got. (1926 Midwest)

‘That’s all the further he kin run.’ Old illit. speaker.

(1940 s.w. Penn.–n. W. Va)

この最後の用例にも示されているように、使用階層は、大体 Type I 及び Type II にほぼ限られているようである。ただ、Kentucky においては例外的に *all the farther*, *all the further* の両方とも Type III によって用いられているといわれ、また、Upper Midwest の東半分では、教養階層の少なくとも半分以上の者が、*all the farther* を用いているという報告もある。⁽²¹⁾ しかし、いずれの場合にも、written English では *as far as* しか用いられない。

なお、これに類似する語法として次のようなものがある。⁽²²⁾

all the better [=as good as; best]

Is that all the better you have? (e. Neb. cent. Kans)

(20) もっともこのことは、この方言が中部だけのものであることを意味するものではない。例えば CAU には *all the further* の方は、南部でもしばしば用いられると述べられている。CAU. p. 19.

(21) 拙稿「アメリカ英語における方言的語法について」参照。

(22) すべて *all + the + a comparative* の形であり、この構文の歴史的背景について Bryant は次のように述べている。This construction seems to have developed from such expressions as *the harder, the braver*, etc. found in Old English (“Courage must be the *harder*, heart the *braver*,” *The Battle of Maldon*, 1, 312). By Shakespeare’s time, *all* followed by *the* and the comparative was established, as seen in *As You Like It*, where Celia says, “*All the better*; we shall be the more marketable” (I, ii, 1. 102). This construction has continued until the present as has the one without *all*, which at times is paired with itself, as in “*The sooner, the better*,” or “*The farther we go the more tired we shall be*.” CAU, p. 18.

all the bigger [=as big as; the biggest]

These are all the bigger apples we have.

(Penn., South, w. cent. W. Va)

all the deeper [=as deep as; the deepest]

Here's all the deeper I can go. (s.e. N.Y.)

all the far [=as far as; the farthest]⁽²³⁾

That's all the far you can throw. (Tenn.)

all the fast, or faster [=as fast as; the fastest]

All the fast it can fly. (Miss.)

all the harder [=as hard as; the hardest]

all the high, or higher [=as high as; the highest]

That's all the high (or higher) he can jump (Tenn.)

all the longer [=as long as; the longest]

Is that all the longer you've been here? (W. Va)

all the more [=as much as; the most; all]

That's all the more you know. (Iowa)

all the smaller [=as small as; the smallest]

all the stronger [=as strong as; the strongest]

もっとも、これらの表現を、*all the farther, all the further* とともに中部方言であると即断することは控えねばならないであろう。方言的に用いられている傾向は強いにしても、教養程度の高い人々にまで使用階層が及んでいる点、および、恐らくは使用分布範囲が全国的に散らばっているのではないかと思われる点などを考えれば、むしろこれらは、一般アメリカ口語であるとするのがより妥当のように思われる。

(23) Very common even among the well educated. 'That's all the far I can jump.' [ADD]

c. quarter till

例えば *quarter to eleven* を *quarter till eleven* と表現するように、*to* の代りに *till* を用いるのは中部特有の方言で、教育程度の高い人々の間にもひろく用いられている。Bryant によれば、中部の中でも特に、south central Pennsylvania から南へかけて使用頻度が高いという。例えば West Virginia では 'What time is it?' 'Ten till 9,' という表現が "The predominant idiom, almost to the exclusion of *to*, *of*, & *c.* More frequently than *until*. などと ADD にも述べられている。

一般に、*to* を *till* で代用する言い方は、イギリス方言にしばしば見られる古い用法であった。EDD にも 'I came up til him' や He read it till an end. のような用法が記録されている。しかし、このような *till* の用法と、中部方言の *till* が結びつくかどうかはつまびらかでない。"by" "before" の代りにも *till* を用いて、'That baby'll walk till he's 9 month old.' だとか 'I must get this done till next Saturday.' というのが Pennsylvania German の影響であるとするならば、⁽²⁴⁾ *quarter till* についても Pennsylvania German と無関係ではないかも知れない。各地における若干の用例は次の通りである。

It's 10 minutes till 12. (n.w. Ark.)

'A quarter till 11.' Old speaker. (s.w. Penn-n. W. Va. line)

20 seconds till 12 midnight. *Radio*. (Minn.)

It was a quarter till 8. (n. W. Va.)

It's 22 minutes till 7. (n. W. Va.)

これらに対し、北部では一般に *quarter of eleven*, *quarter to eleven* が同じ程度に用いられており (ただし Boston 附近では例外的に *quarter of* の方が多い)、南部では *quarter to* がほとんどである。中部の *quarter till* はこれ

(24) ADD, p. 644.

らの表現と接しながら比較的明確な isogloss を保っているといつてよいであらう。

d. wait on

“I'll wait for you” の意味で *wait on* を用いるのは中部方言で、教育程度の高い人々の間にも用いられることが珍らしくない。この語法はもともとイギリス方言で、EDD によれば、主として Yorkshire, Durham, Northumberland 等の北部で次のように用いられていた。

O'd, Davie, man, wait on a bit. — Fraser, *Whaup's*

‘Promise me thoo’lt wait on me?’ ‘Ah’ll wait on thee, even if thoo’s forty years gone!’ — S. Tynedale Stud.

Waitin’ on her comin’ back. — Egglestone, *Betty Podkins’ Visit*

この *wait on* がアメリカへ持込まれてからは、中部各地でひろく用いられるようになった。ADD の用例では、Pennsylvania から West Virginia の北部にかけての地域のものがもっとも多い。ただし、formal な written English では、中部各地でも *wait for* を用いる。⁽²⁵⁾

These is nothing to do but to wait on the ‘cooking.’

(w. N. C., e. Tenn.)

Had I been waiting on that meal to cook supper.

— Chapman, *Happy Mountain* (s. e. Tenn.)

‘When I got there, John was waiting on me.’ (s. w. Penn.)

Waitin’ on money, Doc? Well, here’s half a dollar. (n. e. Ky.)

We’ve waited supper on you until it nearly got cold.

— Stuart, *Trees of Heaven* (n. e. Ky.)

Would you mind waiting on me? (Tenn.)

(25) CAU, pp. 223-224.

We're waitin' on 1942. *Radio*, (w. Ark.)

You go get that \$20 and I'll wait 2 weeks on the rest.

— Faulkner, *Men Working* (Miss.)

Mary's waiting on me here. (n. W. Va.)

That's what I'm waitin' on now. (W. Va.)

Go ahead, I'll wait on you. (n. W. Va.)

I wouldn't wait 5 years on anybody. (n. W. Va.)

I thought you were waiting on somebody. (n. W. Va.)

She's already up the hill waitin on the others. (n. W. Va.)

We're waiting on the bus. (n. W. Va.)

Testimony offered at the trial was that B—had been waiting on a friend; that he ... was returning to wait for his friend.

— Morgantown, *Post* (n. W. Va.)

もっとも、次に示すように、北部や南部でこの表現が用いられていないわけではない。しかしこれらの地方では徐々にすたれつつあるようである。

We waited on the motions of the distributing hand behind the grating.

— Wharton, E., *Ethan Frome* (w. Mass.)

What you waiting on then?

— Bell, V., *Wild One* (Gulf of Mex.)

Boys, I can't wait on you like that. *Radio*. (South)

なお、一般的なアメリカ語の *colloquial* としては、*wait around* が *DAE* に 1895 年からのものが記録されており、*wait about* もひろく全国的に用いられている傾向がある。

I suppose they're *waiting around* till it stops raining. (1889) [*DAE*]

3. 発 音

方言としての発音の特徴は、語い、語法の特徴に比べて一層流動的で捉え

難いのみならず、その分布範囲は、より厳密な意味では、必ずしも語いや語法の分布範囲と一致しないことを考えなければならない。⁽²⁶⁾したがって本稿のように、語い、語法、発音をひとまとめにして論ずることは、ある程度の正確さを犠牲にした上ではじめて可能である。ここでも、前稿にしがって先づ中部方言の特徴を概観し、それから中部のなかでも独得な発音上の特色を示していると考えられる中部大西洋沿岸地域と Pennsylvania 西部について発音の特徴をまとめてみたい。

a. 概 観

まず、母音のあとにくる [r] はほとんど例外なく発音され、*far, barn, poor* はそれぞれ、[faɹ], [baɹn], [puɹ] となる。*on, wash, wasp, log, hog, frog, fog* 等の発音において、[ɔ], [ɔh] または [ɔw] が用いられることにもほとんど例外がなく、*horse* と *hoarse* は発音上の区別がつかない。

Mary, dairy の発音では中部全域でひろく [e] が用いられる。*haunted, careless* 等における弱音節の発音はすべて [ə] となる。

due, new における母音の発音は、例えば *feud* よりも *food* の母音に近い。*with* の th の発音は常に [θ] であり、*wash, Washington* を発音する場合、教育程度の高い人々は例外であるが、通常 [r] の音が入りがちである。

b. 中部大西洋沿岸

この地域は東海岸唯一の地域として、[ɜ], [ɔ] 及び語尾と子音前の [r] が常に発音される。この点については General American の発音と区別はつかない。*forest, orange, horrid* における母音は [ɑ] が最も普通であり、*hurry, carry* は、東海岸特有の [hʌri], [kæri] が用いられる。*four* につ

(26) 例えば Thomas の発音を中心にして方言分布の区分は Kurath の語い中心の区分と、必ずしも一致しない。拙稿「アメリカ英語における方言の研究」pp. 612-641 参照。

いては, [for] となったり [fɔr] となったりして一定していない。

ask, dance, path の母音は, G. A. や南部方言のように [æ] を用いる。*log* の母音は Philadelphia から New Jersey の南部にかけては [ɑ] が用いられ, Baltimore や Washington 地区では [ɔ] が多い。*gong* の母音は通常 [ɑ] で, *mock, doll, involve* などの場合は, ほとんど例外なく [ɑ] となる。*donkey* については [ʌ] がほとんどであるが, [ɑ] の発音もまれではない。*honk* の場合は [ɑ] が普通, ただし [ʌ] の発音もときおり聞かれるようである。

二重母音の [aɪ] は New York 州のように [aɪ] と発音されることもあり, *choice* などでは [tʃɔɪs] と発音されるように, しばしば [ɔɪ] は [oɪ] となる。*out, town* の発音は New York とかわらず [aʊ] が標準的, しかし, [æʊ] もまれではなく, [aʊ] と発音されることもある。

tune, due, news の場合は [ju] よりも [u] を用いる傾向が強い。*absorb, blouse, greasy* の発音で, [z] がしばしば聞かれるのもこの地方の特徴である。

c. Pennsylvania 西部

この地域では, [ɜ], [ə] 及び語尾と子音の前の [r] は発音される。*log, forest, orange, horrid* の場合は [ɔ] が普通で, *four, mourn, hoarse* などでは [or] と [ɔr] の二通りの発音が用いられる。*ask, dance, path* の時の母音は [æ] で, これらの語については, G. A. と全くかわらない。しかし *cot* と *caught* の発音に関しては New England 東部の発音にやや近く, [ɑ] や [ɔ] が同じくこの両語に用いられる点は, この地域の特色である。

hurry と *carry* はそれぞれ [hʌri], [kæri] となって, G. A. よりもむしろ海岸地方の発音に近い。*doll, solve, involve* については, この地域では [ɔ] の発音が非常に多く用いられるのが, 他の地域に見られぬ特色である。*donkey* の発音では, 中部大西洋沿岸地帯に比べて [ʌ] がやや少なく, [ɔ]

の方がかなり多い。

二重母音 [aɪ], [ɔɪ], [aʊ] については, G. A. の場合のように比較的一
定している。 *tune, due, news* についても, G. A. のように [u] が用いられ
るが, *absorb, blouse, greasy* では [z] よりも [s] の方がより一般的であ
る。

参 考 文 献

(項目の末尾の [] 内は本文中に使用した略号)

- Craigie et al, *A Dictionary of American English*, Chicago, Univ. of Chicago Press, 1965. [DAE]
- Murray et al, *The Oxford English Dictionary*, Oxford, Univ. Press, 1933. [OED]
- Mathews, M. M., *A Dictionary of Americanisms on Historical Principles*, Chicago, Univ. of Chicago Press, 1966. [DOA]
- Wentworth, H., *American Dialect Dictionary*, New York, Thomas Y. Crowell Co., 1944. [ADD]
- Wright, J., *The English Dialect Dictionary*, London, The Times Book Club, 1898. [EDD]
- Bryant, M. M., *Current American Usage*, New York, Funk & Wagnalls Co., 1962. [CAU]
- Horwill, H. W., *A Dictionary of Modern American Usage*, Oxford, University Press, 1944. [MAU]
- Fowler, H. W., *A Dictionary of Modern English Usage*, Oxford, University Press, 1965.
- Nicholson, M., *A Dictionary of American English Usage*, New York, The New American Library of World Literature, Inc., 1958.
- Kurath, H., *A Word Geography of the Eastern United States*, Ann Arbor, Univ. of Michigan Press 1966.
- Atwood, B., *A Survey of Verb Forms in the Eastern United States*, Ann Arbor, Univ. of Michigan Press, 1953.
- McDavid, R. I., "American English Dialects," *The Structure of American English*, New York, Ronald Press Co., 1956.

- Mencken, H. L., *The American Language*, 4th ed. New York, Alfred A. Knopf, 1957.
- Mencken, H. L., *The American Language*, Supplement I & Supplement II, New York, Alfred A. Knopf, 1956.
- Krapp, G. P., *The English Language in America*, New York, Century Co., 1952.
- Pyles, T., *Words and Ways of American English*, New York, Random House, 1952.
- Marckwardt, A. H., *American English*, New York, Oxford University Press, 1958.
- Tucker, G. M., *American English*, New York, Alfred, A. Knopf, 1921.
- Kerr & Aderman, *Aspects of American English*, New York, Harcourt, Brace & World, Inc., 1963.
- Thomas, C. K., *An Introduction to the Phonetics of American English*, New York, The Ronald Press Co., 1947.
- Bronstein, A. J., *The Pronunciation of American English*, New York, Appleton-Century-Crofts, Inc., 1960.
- 宮部菊男 「イギリス・アメリカの言語」創元社, 1958.
- 尾上政次 「現代米語文法」研究社, 1957.
- 武本昌三 “アメリカ英語における方言の研究” 室蘭工業大学研究報告, 第5巻第2号, 1966.
- 武本昌三 “アメリカ英語における方言的語法について” 室蘭工業大学研究報告 (文科編), 第6巻第1号, 1967.
- 武本昌三 “アメリカ英語における北部方言の特徴について” 人文研究, 第38輯, 1969.
- 武本昌三 “アメリカ英語における南部方言の特徴について” 人文研究, 第39輯, 1969.